

構造物の景観評価における文脈依存性 擁壁を例に

平野 勝也¹⁾・川端 剛弘²⁾

¹正会員 工博 東北大学大学院情報科学研究科
(〒980-8579 宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉 6-6-06)
E-mail:hirano@plan.civil.tohoku.ac.jp

²正会員 株式会社復建エンジニアリング 保全技術部
(〒103-0012 東京都中央区日本橋堀留町 1-11-12)

心理学における「文脈効果」から考えると、土木構造物の機能が設置される場所が持つ風景の文脈に合っていると感じられることで風景の評価が向上するという仮説が考えられる。この新しい観点から土木構造物を評価する研究の端緒として、本研究では、擁壁を例に、仮説の検証を試みた。仮説の検証では、刺激を用いた順位法及び SD 法を用いて行った。その結果構造物の設置による風景の美しさの低下は文脈の影響により軽減することが明らかとなり、風景の文脈によって、構造物の景観評価が異なることが、実験的に示された。

Key words : structures,function,context,inevitability

1. はじめに

(1) 風景の文脈

風景の認識において、古くから、「文脈効果」が心理学の分野で指摘されている。これは、風景などを表す、刺激の中に、意味的な仲間外れ、スケール・位置的な仲間外れが存在していると、瞬間視であっても、仲間外れのものだけ、認識率が高いというものである。仲間外れであることを、真っ先に認識できると言うことは、個別要素が認識される以前に、刺激が持つ全体の文脈を認識していることを示していることに他ならない。人間の視覚処理過程を考える上で、大変興味深い現象である。この、「文脈効果」は、瞬間視により、人間の処理過程を追うものであるが、瞬間視でなくとも、人間の視覚認識において、文脈は、大きく認識に寄与する、重要な観点であろう。

土木構造物は、景観阻害物と見なされ、問題視されることがあるが、これは風景の文脈の観点から解釈出来る場合も多いのではないだろうか。つまり、その風景の文脈において、土木構造物が、風景の文脈にそぐわないものとして認識された結果、ちょうど「文脈効果」の仲間外れの要素が早期に認識されるように、仲間外れのものとして、目立ち、強い印象を与えてしまっているとする解釈である。

既存の景観研究では、こうした文脈の問題を、周辺風景との調和という概念で扱ってきた。周辺風景との調和を扱う研究は数多いが、近年では、例えば、大野らが、河川景観を対象に、フラクタル次元を用いて、周辺との調和について分析している¹⁾。この研究は、いわば、構造物と、その周辺の風景が、フラクタル次元において相関性があると調和感を生むということ、暗黙の仮定にしている。すなわち、調和感を生む図像的特徴についての仮説が提示されていることを意味する。

しかしながら、こうした、図像的なアプローチでは、工学的には大変有用ではあるが、何が調和感を生む根源なのか、なぜ、フラクタル次元などの指標が調和感を表現しうるのか、明確な展望を持たないアプローチとなっている。その一方で、文脈の観点で、この問題を扱うことは、意味的なものまで含み得るため、なぜ、調和しないのか、どうしたら調和するのか、深めることのできるアプローチではないかと、筆者らは考えている。

では、ある土木構造物が、「文脈効果」が発動することなく、文脈に整合するとはどういうことだろうか。あらゆる土木構造物は、なんらかの機能のために風景の中に存在する。例えば、小さな用水路は、田園風景の地として存在することが殆どであろう。これは、用水路の機能が灌漑のためにあり、周辺の水田と、機能的に密接に結びつきながら、完全に風景の文脈の中に埋没して存在

していると考えられるのではないだろうか。この用水路のように、土木構造物が持つ機能が、明示的に周辺の風景と関わっていると認識されれば、文脈に整合すると考えて良いのではないだろうか。当然、その土木構造物の図像的な目立ちやすさも文脈に整合するか否かに関わって来るであろう。

以上のように、土木構造物は、その機能が明示的に形に表れやすいものであることから、その機能と意味が一致しやすく、風景の文脈との整合性について、機能の観点から読み解いていくことが出来そうである。そして、機能が周辺の風景と関わりが深いと認識される場合、その構造物が文脈に整合する結果、「文脈効果」が発動せず、周辺と調和した景観評価の高い土木構造物になるのではないかという、メタ的な仮説を採ることが出来ると考える。

(2) 構造物の機能とイメージ評価

そこで、次に、構造物の機能に着目した景観研究、構造物を含めた風景という観点での研究に着目し、既存研究を見る。

まず、構造物の機能イメージに関する研究については、構造物の力の流れを意識させるデザインの研究、構造物の役割をイメージさせるデザインの研究等がある。代表的な研究として、阿部ら²⁾は構造物の力の流れに基づくイメージに着目し、その美的評価への影響について議論している。また杉山³⁾は形の成り立ちを意識させるデザインについて議論し、デザインの上での有益な示唆を与えている。

このような構造物の機能に着目した研究では、構造物の役割や力の流れを意識させることで評価が向上するという結論が得られている。しかし、こういった研究の多くは、風景の文脈という観点を持たないことは当然ながら、構造物そのものの操作によるイメージの違いのみに着目しており、構造物が設置される周辺環境に関しての議論はなされていない。

構造物を含めた風景としての研究については、先述の大野らの研究¹⁾の他、サイコベクトルに着目した杉山らの研究⁴⁾等、風景と言う観点での研究は多々有る。着目すべきものとして、平野⁵⁾は山間部景観において、点景的效果に着目し、点景的效果によって風景の好感が上昇するという結論を得た。これらの研究に代表される風景に着目した研究の多くは、構造物を操作することでのイメージの変化を分析している。

これらの研究のように土木構造物を操作して周辺景観との調和を得る形状を得ようとするアプローチでは、純粋に風景の文脈の観点から、構造物を見ることは出来ない。なぜなら、構造物が図として目立つかどうか、そ

の評価に大きく影響を及ぼすと考えられるからである。実際、既存の景観研究の成果も、それに基づく実践も、その構造物を目立たせないことによって、風景との調和を図ってきたとも言える。本研究では、構造物を固定とし、周辺の風景を変化させることによって、なるべく構造物の目立ちやすさが影響しない研究の枠組みを採る。当然ながら、構造物が目立つかどうかは、周辺との相対的なもので決定されるもので、周辺の風景を変化させれば、目立ちやすさも変化するが、構造物自身を変化させることよりも影響は小さいと考えている。

2. 目的と方法

(1) 目的

本研究は、風景の文脈という観点から、土木構造物の景観評価を行い、風景と調和する土木構造物への思索を深めるための第一歩である。対象は、擁壁を選んだ。これは、先述の通り、意味的な文脈は、土木構造物においては、機能から見る事が出来ると考える立場に立っている。擁壁は、斜面崩壊を防ぐという、明示的な機能を持つ一方で、単純で巨大な構造物で、図像的に目立ち、景観阻害物と扱われることが多いことから、端緒としての研究対象として相応しいと判断したためである。実際の擁壁デザインにおいても、如何に目立たなくするかということが多く行われており、文脈との関わりを調べることが、デザイン上も有益であると考えられる。

そこで本研究は、風景の文脈から土木構造物の評価を考えるという新しいアプローチとして、擁壁を対象に、「風景の文脈に整合する土木構造物の評価は高くなる」というメタ的な仮説の検証への、一歩を踏み出すものである。具体的に、本研究では、擁壁の景観評価と、擁壁の機能と斜面との関わりをそれぞれ個別に評価し、その関係を見ることで、まず、周辺風景の文脈が擁壁の景観評価にどの程度の影響を与えるのか、仮説の傾向が見て取れるのか、心理実験的に確認を行うことを目的とする。

また、それと同時に、フリーフレームや吹きつけなど、工法との比較も行う。

(2) 方法

擁壁において、「機能が周辺の風景と関わりが深いと認識される」とは、どのようなことになるだろうか。擁壁は、斜面崩壊を防ぐために設置されるのだから、斜面と密接な関わりを持つことは言うまでもない。例えば、周辺が崩壊しそうな斜面であれば、関わりは感じられないことになり、文脈に整合しなくなる。逆に、急峻であればあるほど、擁壁が崩壊を防ぐように強く関わっ

ていることが感じられ、文脈に整合し、風景に調和した評価の高い構造物になるのではないだろうか。

こうした解釈を実際に検証するにあたり、専門家ではない被験者に擁壁が機能しているのか問うのは、難しいことが想定される。そこで、本研究では、擁壁の機能を「斜面の危険感」として被験者に問うことにした。擁壁設置の有無で、危険感が下がるという評価が得られるということは、擁壁が機能していると被験者が認識していることの証左であると考えからである。

つまり、図-1の様に、擁壁の無い斜面とある斜面について、風景の美しさと、斜面の危険感を独立して実験的に得られれば、仮説が成立する場合は、擁壁の設置により危険感が大きく低減し、すなわち擁壁が機能するという印象を与えることにより、調和を生む結果、美しい風景を創り出すということが示されることになる。一方、擁壁の設置により印象が危険感に関してはあまり上昇せず、風景の評価が大きく低減すれば一般的に言われるようにこの擁壁が景観障害物として認識されていると言えよう。

3. 斜面評価実験

以上の方法に基づき、ここでは、実際に、斜面の刺激を作成し、印象評価実験を行うことで仮説を検証する。

(1) 実験

斜面の印象を明らかにするため、実験を行う。実験はそれぞれの刺激の危険感、風景の評価を明らかにするものである。順位法を用い、被験者に刺激の順位付けをしてもらう実験を行う。本稿では求めたい評価項目が決まっていること、被験者の負担を少なくする必要性を考慮し、順位法を用いて実験を行う。得られた順位をThurstoneの比較判断の法則を用いて分析することで、各刺激の尺度値を得る。これにより、各斜面の擁壁設置有無による印象の違いを明らかにし、仮説の検証を行う。

本研究では実験を1, 2, 3に分け行った。それぞれの実験の狙いは以下の通り。

実験1では、同じ擁壁が、周辺の斜面の違いによって、どのように、危険感と風景の評価が変化するか見するための実験で、擁壁無しの場合と擁壁有りの場合の刺激を用いて順位付けを行うものである。

実験2では、危険感の変化や風景の評価の変化が工法の違いによってあるのか、その影響を考察するために、擁壁設置時、フリーフレーム設置時、吹き付け工施工時の刺激を用い、順位付けを行うものである。

実験3は、順位法では、より正確な順位が解る一方で、

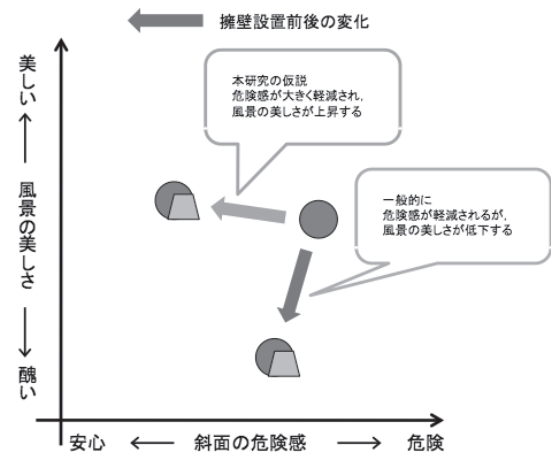


図-1 擁壁設置による印象変化の模式図

後述する表面形状の違いといった、それぞれの刺激が持つイメージを補足することは出来ないので、SD法を用いて各刺激の印象評価を行うものである。

(2) 刺激とする斜面の分類

本研究における周辺の風景とは山の斜面である。擁壁は基本的に山間部の斜面に設置されるためである。現場調査を行い景観評価に影響すると思われる要素として斜面傾斜、表面形態を挙げた。そしてこれら二つの要素は土質に大きく影響される。例えば土質が土や砂のようなものであれば、傾斜は比較的緩く、表面は緑に覆われやすい。本研究では代表的なものとして、土質が硬岩の斜面と、砂質土の斜面の二種類を取り上げ刺激を作成する。

まず傾斜については標準法面勾配を各土質の最も急な斜面とし、急なものから緩やかなものまで5段階を作成した。斜面の傾斜については、標準法面勾配を参考にし、硬岩の最も急な斜面角度を70度、砂質土の最も急な斜面を50度とした。

次に表面形態に関して、硬岩については岩が表出している状態、砂質土については、草が繁茂した状態とする。これらを組み合わせ10種類の斜面刺激を作成する。

以上より、本実験の刺激の作成にあたり、危険感を表すと考えられる現実的な斜面傾斜角のバリエーション、及び、異なる印象を持つと考えられる、表面形態として、2種類を考えていることになる。

(3) 刺激の作成

刺激の作成は、斜面模型を撮影した写真をベースに、それをコンピュータ上で加工するという方法を使った。模型写真をベースにしたのは、斜面傾斜と表面形態の操作し易さの観点からである。刺激画像は谷地形を想定して作成し、左側斜面のみを擁壁等の操作を行った。擁壁設置時の斜面の元の形状すなわち、元々の風景の文脈を理解することは出来ない。しかし谷地形にし、左右の斜

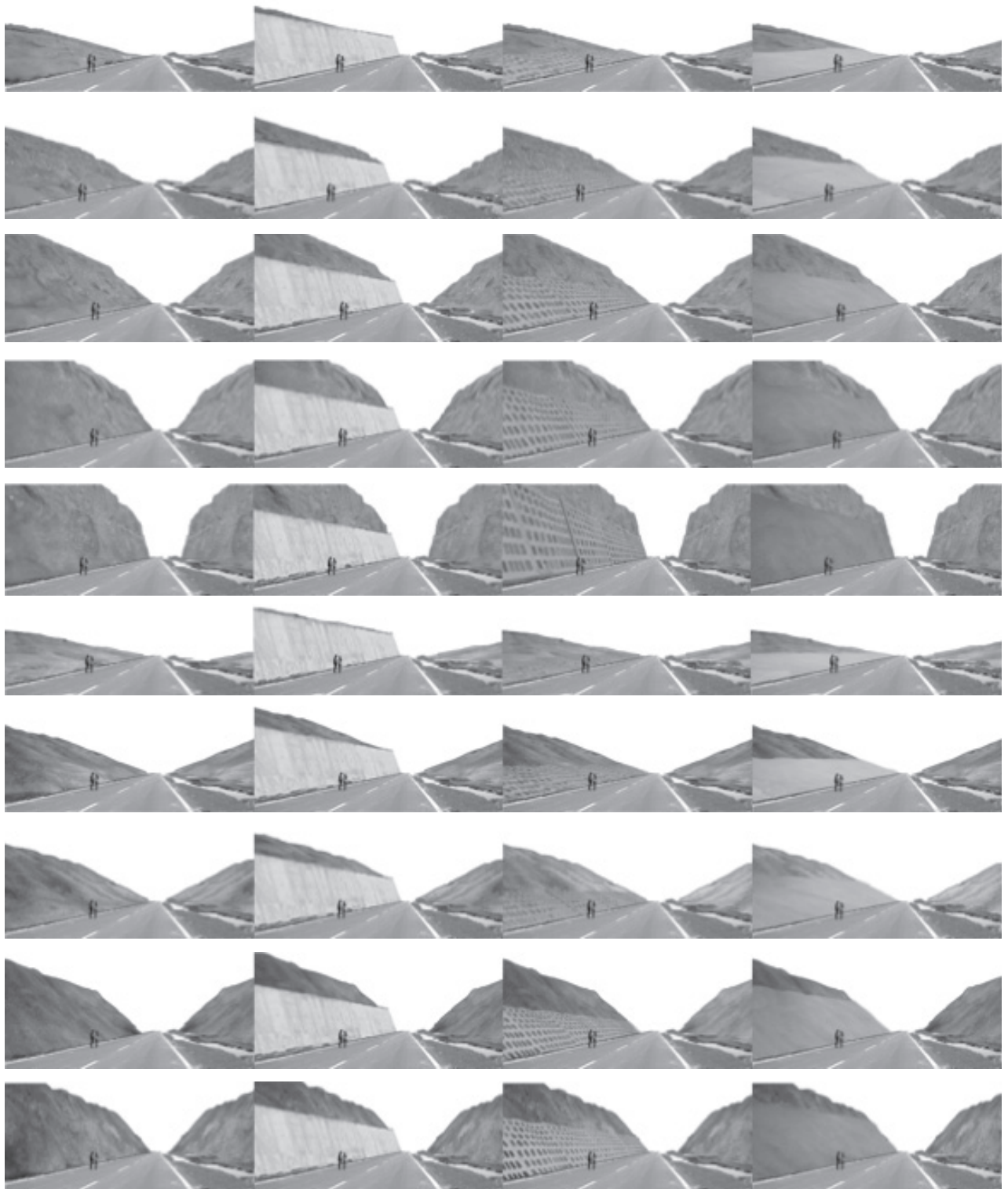


図-2 刺激（上から順に硬岩（緩→急），砂質土（緩→急）．左から順に構造物無し，擁壁，フリーフレーム，吹き付け工）

面を同じにすることにより，より適切に，周辺の風景が持つ文脈を被験者に伝えることが出来ると考える．またこれにより，同表面形態，同傾斜，別工法の斜面の印象を比較することが出来ると言える．**実験1**で使用する刺激として擁壁無し斜面，擁壁設置斜面それぞれ10種類の計20種類，**実験2**で使用する刺激として擁壁設置斜面，フリーフレーム設置斜面，吹き付け施工斜面それぞれ10

種類の計30種類を使用する．使用した刺激は図-2の通りである．ただし，実際にはカラーのものをを用いた．

なお，刺激では，右側の斜面と擁壁等を設置した左側の構造物より上の斜面を同じ勾配としている．現実の斜面に擁壁等が設置される場合は，山を切土しながら，行われる．特に擁壁はその施工上，余切りした上で，擁壁を設置し，裏込めを行うため，谷地形であっても，左右

が刺激の様な状態になることはない。また、工法によっても構造物上部の切土部分の形状は当然異なる。しかしながら、本研究は、実デザインの評価に主眼があるのでなく、風景の文脈を明示し、その文脈の違いによって、構造物の評価がどのように変わるかを検討することに主眼があるため、より文脈が各工法によって公平に被験者に伝わるように配慮した結果である。

(4) 手続き

刺激を用い**実験1～実験2**の実験を順位法により行った。**実験3**をSD法により行った。A6版1枚に刺激を1枚印刷したものを使用した。各実験の前に、斜面に関して現実の斜面を被験者が想像しやすくするため、斜面の説明、工法の説明を行った。これらは斜面の表面の形態についてのものである。

a) 実験1-a

被験者1人に対し擁壁無し及び擁壁設置斜面の刺激20枚を渡し、「20枚の刺激画像を、左側斜面が崩壊する危険性が高いと感じる斜面の順に1位から20位まで順位付けして下さい。」と教示し、各刺激に1位から20位迄順位付けを行ってもらった。

b) 実験1-b

被験者1人に対し擁壁無し及び擁壁設置斜面の刺激20枚を渡し、「20枚の刺激画像を、道路景観として美しいと感じる斜面の順に1位から20位まで順位付けして下さい。」と教示し、各刺激に1位から20位迄順位付けを行ってもらった。

c) 実験2-a

被験者1人に対し擁壁設置斜面、フリーフレーム設置斜面、吹き付け施工斜面の刺激30枚を渡し、**実験1-a**と同様の教示を行った。

d) 実験2-b

被験者1人に対し擁壁設置斜面、フリーフレーム設置斜面、吹き付け施工斜面の刺激30枚を渡し、**実験1-b**と同様の教示を行った。

e) 実験3

被験者1人に対し、擁壁無し斜面、擁壁設置斜面の刺激を提示し、「20枚の刺激画像をそれぞれ4形容詞対7段階で評価して下さい。」と教示し、4形容詞対を提示した。使用する形容詞は、「自然的-人工的」「面白みがある-面白みが無い」「絵になる-絵にならない」「男性的-女性的」の4形容詞対である。**実験3**で使用する4形容詞対は独立性、自然景観、自然景観における人工物を評価する形容詞対であることを考慮し、平野の研究⁹⁾を参考に選出した。

本研究では風景の評価を「道路景観としての美しさ」とした。これは被験者に構造物のある道路景観という状

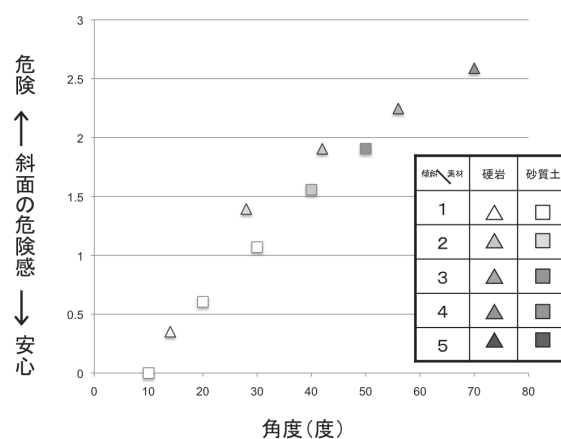


図-3 危険感と角度の関係

況をイメージし易くさせるためである。

また、それぞれの実験時間は被験者が十分に考えられるよう制限時間を設けずに行った。被験者は東北大学及び同大学院の地盤や工法を専門としない学生30人である。属性に偏りがあるため、本実験はこの限りのものであるが、斜面崩壊に関する知識を持たない学生に限定していること、美しさや危険感という単純な問いかけしかしていないことから、この被験者の偏りによって、本実験の信頼性を損なうほどのバイアスを含んでいるとは考えていない。

4. 実験結果と考察

実験1, 実験2の実験で得られた順位に関して、その尺度値算出にはThurstoneの比較判断の法則ケースVが一般的であるため、これを用いて尺度値を算出した。また**実験3**で得られたプロフィール曲線より、因子分析を行った。

(1) 傾斜と表面形態の違いによる危険感の違い

まず、擁壁設置とは関係なく、斜面の危険感がどのように把握されているか把握するため、実験結果より、斜面の傾斜と表面形態による斜面の危険感を確認した。**(図-3)**。傾斜の違いからは、当然の結果ではあるが、傾斜が急になるほど危険感が増していることが分かる。

次に表面形態の違いに着目すると、砂質土斜面が硬岩斜面より危険感、やや低く布置されている。同様の傾斜角であれば、岩盤力学的には、硬岩斜面の方が、安定していると考えられるが、やはり、一般の被験者においては、岩の持つ印象が影響しているものと想像できる結果である。

(2) 擁壁設置による危険感軽減の効果

まず、擁壁設置前後での危険感の変化に着目する。

(図-4) 急傾斜の砂質土斜面、すべての硬岩斜面において、擁壁設置により危険感が軽減するという結果になっていることが分かる。これらは、斜面が危険なものと感

じられており、擁壁を設置することで危険な斜面から守られ安心感が上昇したと考えられるが、逆に、緩傾斜の砂質土斜面においては、擁壁の存在により、かえって危険感が増している。

表面形態別に見てみると、砂質土斜面では、危険感が高いと感じられている斜面ほど、擁壁設置による危険感の軽減が大きい。また、美しさの低下も小さいものとなっている。もし文脈の影響が無いとすれば、単純に擁壁設置による悪影響が同等に表れ、斜面傾斜に関係なく危険感の低下は一定になる筈だが、この結果では、傾斜によって危険感の低下は明らかに異なっている。

つまり、緩傾斜においては、擁壁の存在がかえって危険感を高めて、美しさの評価も著しく下げていたものが、急傾斜になるにつれ、擁壁が、安心感を生むようになり、さらには、美しさの低下も、小さくなって行っている。これは、斜面の傾斜という周辺の風景の文脈が、擁壁の機能を介して、評価を変えていったという、仮説の傾向が伺える結果である。なお、擁壁設置により、美しさが上昇するという事は無かったが、これは、刺激上で設置する擁壁の規模にも依存することであると考えられる。本研究の観点から重要なのは、美しさが上昇しなかったと言うことではなく、同じ擁壁を、異なる傾斜という文脈に落とし込んだところ、その評価が文脈によって異なっているという結果が得られている点にあることを付記しておく。

一方、硬岩斜面においては、傾斜角に依らず、全ての斜面で危険感も美しさも同程度に低下している。これは、仮説の観点から見れば、斜面の傾斜という文脈には、評価が全く、影響されていないことを意味している結果であり興味深い。

(3)SD法の結果を用いた考察

前節で論じたように、硬岩の変化は斜面傾斜の文脈では説明ができないものであった。そこで、この現象について、実験3で行ったSD法の結果を用いて検討を加える。(表-1, 図-5)

図-5は見やすさを考慮して、第2因子まで含めた布置図としているが、寄与率は第1因子が81.95%と、ほぼ第1因子で説明が可能であり、第1因子のみで考察を行う。因子負荷量から第1因子を「自然的、魅力的、女性的 - 人工的、男性的」軸と位置づけ、各斜面の因子得点を見ると、砂質土斜面は自然的、魅力的、女性的、硬岩斜面は中間的、擁壁設置斜面は人工的、男性的と、きれいに別れた布置となっている。つまりこのことは、表面形状の違いが、明確なイメージを持ち、危険感とは異なる文脈を形成していたことを意味している。つまり、今回の実験において、刺激は、危険感を表す傾斜角という文脈と、表面形状および、擁壁が持つ印象という、二つの文脈を内包した刺激であったと、再確認できる。

これらのことを考慮し順位法の結果を再考すると、砂質土の緩斜面については、砂質土斜面が持つ女性的文脈に男性的擁壁が合わず、また危険感の文脈に擁壁が合わないことから美しさが大きく低下し、傾斜が急になるにつれ危険感の文脈に擁壁が合うことで美しさの低下が小さくなったと想像できる。一方、硬岩斜面については男

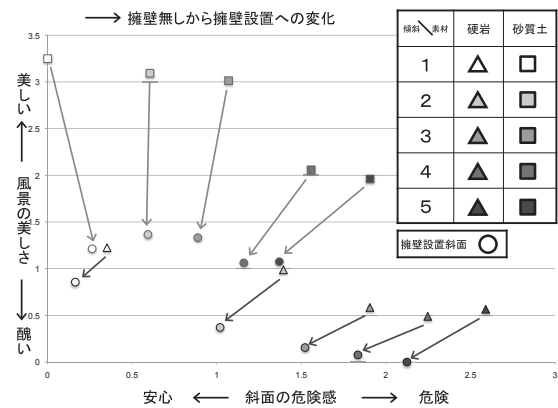


図-4 危険感と美しさの関係

表-1 因子負荷量

因子負荷量		
形容詞対	因子No.1	因子No.2
自然的-人工的	0.88	0.39
面白みが有る-面白みが無い	0.99	0.08
魅力が有る-魅力が無い	1.00	-0.06
男性的-女性的	-0.73	0.51
寄与率	81.95%	10.44%

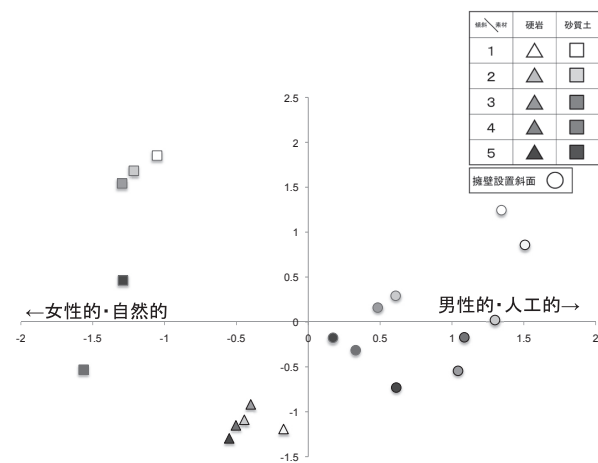


図-5 因子得点布置図

性的擁壁が斜面に比較的なじみやすく、この影響が大きいため傾斜に関係なく美しさの低下が抑制されたと想像できる。

つまり、刺激が内包している二つの文脈の相互作用と見ることで、文脈により、同じ擁壁を設置した場合の影響を、統一的に解釈しうる結果となっている。

(5)工法の比較

擁壁設置、フリーフレーム設置、吹き付け施工を比較した際の危険感、美しさの結果を(図-6)に示す。先述の通り、ここで擁壁の傾斜は常に一定であるのに対し、フリーフレーム、吹き付け工の傾斜は斜面傾斜に合わせてあるため、想定される基の地形条件が同じではないことを、再度断っておく。

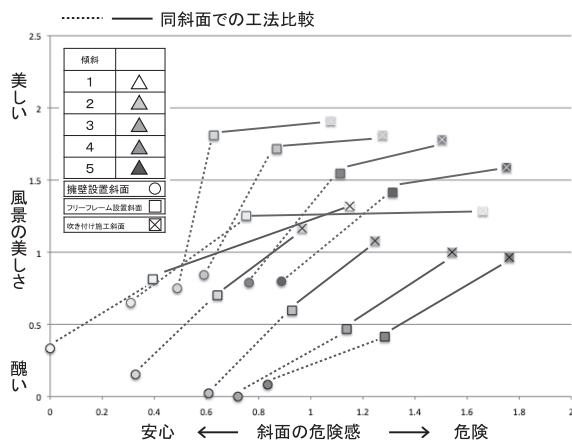


図-6 各工法の危険感と美しさの関係

全体の傾向として、吹き付け工が最も危険感があるがその一方で、美しさが高い。フリーフレーム、擁壁の順に、危険感が小さくなり、美しさも小さくなる傾向が伺える。このことは、安心感を与える工法は美しくなく、美しいと感じる工法は危険感が高いという、どちらの工法が一概に良いとは言えないことを示しており、斜面デザインの難しさを如実に表す結果となった。

5. 結論

以上のように、本研究は、文脈の観点から構造物の景観評価を行う研究の端緒として、斜面傾斜、及び表面形状という文脈を持った刺激を用いて、心理実験を行った。その結果をまとめると、以下の三点に集約できる。

- ・危険感と言う文脈の効果により危険と感じられる斜面ほど擁壁設置による危険感軽減の効果が大きくなり、美しさの減少が小さくなる。
- ・斜面の表面形態により自然的、女性的といった文脈があり、これらの文脈の影響により、砂質土斜面と硬岩斜面では、評価の変化が大きく異なるものとなったが、それぞれの文脈から適切な解釈が付与できる。

- ・擁壁はフリーフレーム、吹き付け工に対し、最も安心感を与える工法である。一方、吹き付け工が最も美しいと認識され、どの工法が最も良いかは一概に言えない。

本研究において、美しい景観形成のための構造物と文脈の関係に着目するという観点の有効性は確認されたと考える。今まで、図像的な構造物形態の調和を論じることが主だった構造物景観に関して、今後、この文脈、すなわち、機能と周辺の風景との関わりという観点での研究を深めることで、なぜ風景に調和するのか、どうすれば調和するのかと言った、構造物と風景の関係性をより深く思索できる可能性が見いだせたのではないだろうか。なお、今回の実験では、擁壁の設置により、評価が上がる刺激は無かったが、評価の下がり方が、異なっていたことから、擁壁そのものの規模、形態によっては、急峻な地形においては、擁壁があった方が風景としての評価が高まるようなケースも存在するのではないだろうか。

参考文献

- 1) 大野研, 大野博之, 鈴木勝士, 葛西紀巳子: 色彩・形状の観点からみた数値的景観評価の試み, 土木学会論文集IV Vol. 695, No. 54 pp31-44, 2002
- 2) 阿部哲子, 石井信行, 藤野陽三, 阿久津正大: 視覚的に力の流れを認識する橋の形に関する研究, 構造工学論文集 vol. 42A, pp. 471-480, 1996. 3
- 3) 杉山和雄: 橋の造形学, 朝倉書店, 2001
- 4) 杉山俊幸, 深沢泰晴, 辻和政, 高橋良武: サイコベクトルを用いた橋梁景観の定量的評価, 構造工学論文集, Vol. 35A pp. 523-532, 1989
- 5) 平野勝也, 五十嵐淳博: 山間部の道路景観における法面, 擁壁, 覆道の知覚特性と景観評価, 土木計画学・論文集 vol. 20, No. 20, 2003
- 6) 武藤真介: 計量心理学, 朝倉書店, 1982
- 7) 篠原修: 土木デザイン論, 東京大学出版会 2003
- 8) 篠原修・鋼橋技術研究会編: 橋の景観を考える, 技報堂出版, 1994

(2010.4.16 受付)

CONTEXT DEPENDENCY IN EVALUATING STRUCTURES IN LANDSCAPE -A CASE STUDY OF RETAINING WALL -

Katsuya HIRANO and Takehiro KAWAHASHI

Considering contextual effect in psychology, it is possible to say that when a man feels structure's function fits to the context of the place, the man feels the structure has inevitability and high value of the scenery. Psychological examination of impression was operated to verify this hypothesis taking retaining wall as an example. As a result, There are no cases which the existence of retaining wall make value of scenery high. But, it was found that retaining wall gets inevitability and reduces a depression of value of the scenery caused by existence of retaining wall, in case of steep slope surroundings.